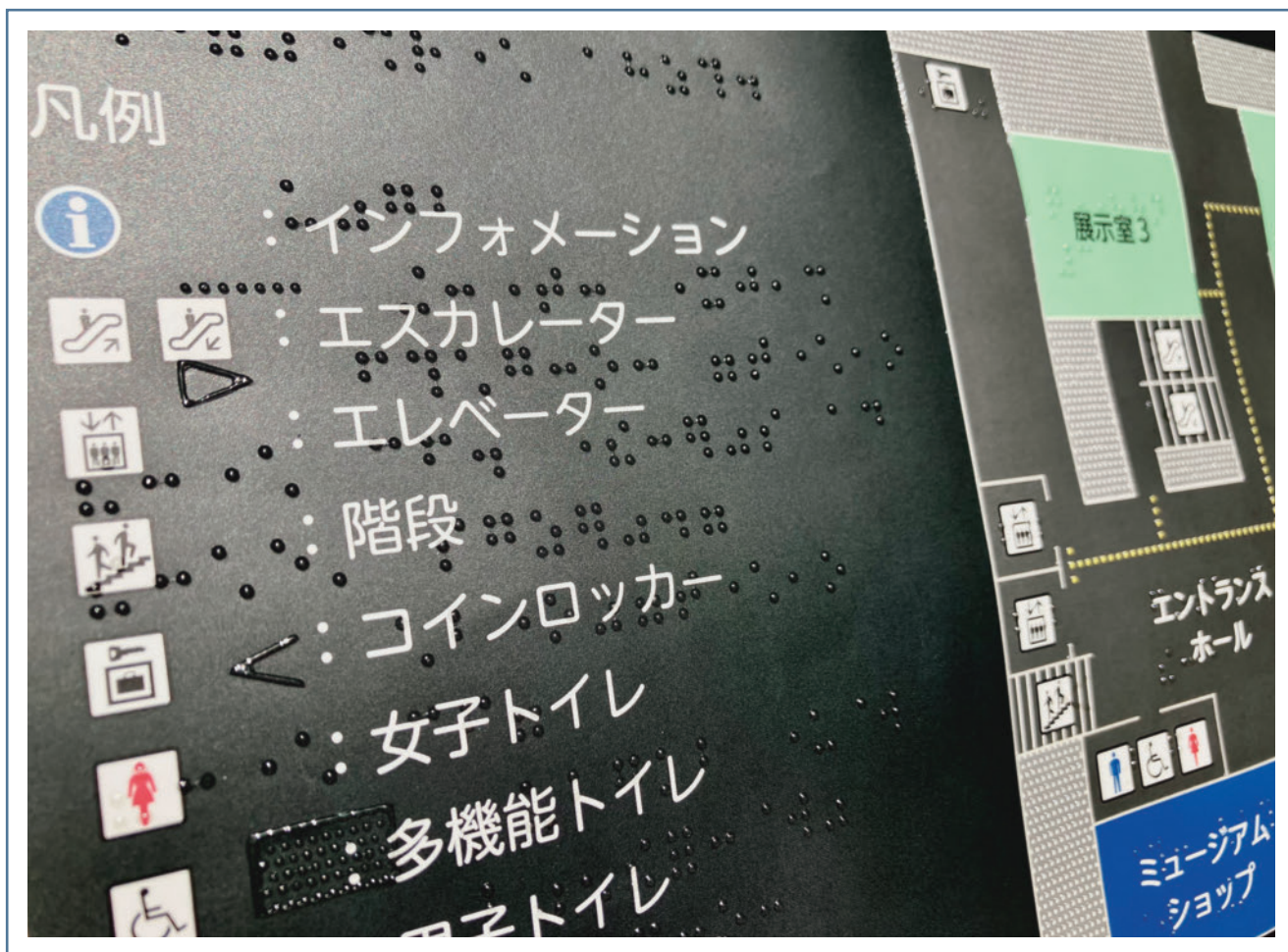




特集

視覚に障がいがある人の行動範囲を広げ、 情報保障につなげる「点字・触知図」を 当事者目線で制作続ける

—— 欧文印刷株式会社

点字・触知図の実際と制作のフローを紹介します。

東京国立博物館 東洋館 2025年9月23日～11月16日

「博物館でアジアの旅 日韓国交正常化60周年 てくてくコリアー韓国文化のさんぽみちー」での制作実例。

博物館の敷居を下げる取り組みの一步に

点字・触知図の館内ガイドを導入した 古代オリエント博物館の教育普及員 高見妙さんに聞く

見えない人にも「伝わる」を届ける「点字・触知図」の疑似体験 桜雲会のエキスパートが描く情報保障

関連書籍紹介 ほんのいんふおめーしょん

アイワードが札幌市で初開催した「点字・触知図セミナー in 札幌」を告知するチラシ
2026年8月20日



点字・触知図セミナー in 札幌の会場で欧文印刷が制作した点字・触知図に触れる参加者

特集

視覚に障がいがある人の 行動範囲を広げ、 情報保障につなげる 「点字・触知図」を 当事者目線で制作続ける ——欧文印刷株式会社

博物館や美術館、大学、駅、公園など不特定多数の人が利用する施設で、視覚に障がいがある人にも利用しやすい「点字・触知図」を使った施設案内図などを制作する事例が増えています。まだまだ馴染みのない点字・触知図とは何か、どのような場面で利用されているのかなど、10数年前から本格的に手掛ける欧文印刷株式会社(本社・東京都文京区)執行役員の渡辺浩美さん、同社第2お客様担当部の佐々木薫さん、同社デザイナーの中村知絵さんに、アイワードが札幌市で初開催した「点字・触知図セミナー in 札幌」の会場で、お話を聞きました。(文・写真/片山健一 取材日2026年8月20日)

「地図」ではなく「知図」

欧文印刷が制作する点字・触知図は、紙の印刷物へ透明なUV硬化ニス（紫外線硬化樹脂インキ）を重ねて、点字の高さ形成したもので、点字のほかにも、フロアマップ・作品輪郭などを表現することもできます。透明な点字は通常のカラー印刷の視認性を損なわないので、晴眼者と視覚障がい者が共用品として使用できるユニバーサルデザインを目指した印刷物です。

同社執行役員でお客様担当部門長の渡辺さんは「14年前に、初めてUVオフセット印刷機で点字を印刷



（左から）欧文印刷の佐々木さん、中村さん、渡辺さん

したのが当社で、以来、障がい者団体などからアドバイスをもらい、全ての案件で専門家による『触読校正』を徹底するなど、当事者の目線を取り入れながら品質を高めてきました」と話します。

同社では、施設案内図や駅の構内図、公園のエリアマップ、美術館などの展示物紹介、カレンダーなどを制作しており、紙製で携帯しやすく、通常の印刷物と同様に大量生産も可能です。身近な所では郵便ボストの集荷時間の部分にある点字（点字シール）も作っているそうです。

点字・触知図のユニークな活用事例としては、カラー印刷した絵画や写真の主要な輪郭や形状をUV硬化ニスで盛り上げて表現した「触れる絵」というものもあります。渡辺さんは「『しょくちず』は『触地図』と『触知図』の2種類の字が使われますが、当社では、触れて情報を知ってもらおうという意味から『触知図』という表記を使っています」と説明します。

視覚障がい者の「合理的配慮」に活用

点字・触知図が注目されている背景には、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差



道内各地から参加のあったアイワード主催の点字・触知図セミナー（2026年8月20日 札幌市教育文化会館）

別解消法）」が2016年4月に施行され、障がい者からの意思表示があつた場合に、負担が過重にならない範囲で、バリアを取り除くために必要な対応をする「合理的配慮」の提供が行政機関に義務付けられ、同法の改正で2024年4月からは民間事業者にも合理的配慮の提供義務

が拡大されたことがあります。特に学びの場となる教育施設や博物館、美術館などでは、アクセシビリティ（利用しやすさ）の改善による「情報保障」が、喫緊の課題でありながらも、各施設でいまだ手探りの状態が続いています。

国内の視覚障害者手帳保持者は約

31万人に上り、このうち、点字が読める割合は10%前後、65歳以上の割合は約70%とされています。これらは、先天的な障がいの場合には盲学校などで点字を学習していますが、緑内障などで後天的に目が見えなくなる高齢者が圧倒的に多いことを表しています。さらにロービジョン（弱視）を含めると約145万人と言われ、点字だけでは十分な情報伝達できていない状況です。

このため、視覚障がい者のための情報保障としては、①触知図、②大活字・カラーデザイン、③音声案内の3つを組み合わせることが望ましいです。

アクセシビリティ整備は道半ば

同社の点字・触知図は、ベースの図面は黒地にゴシック体の白文字にするなど読みやすさにも配慮しているほか、図面上にある二次元コードをスマートフォンで読み込むと、音声情報が流れる仕組みも開発しています。

点字・触知図の営業担当で障がい者から直接話を聞く機会の多い、同社第2お客様担当部の佐々木さんは「興味のある場所に出掛けても、どこに何があるか分からず、とても時

間がかかった」とか「情報が少ない場所には行く勇気が湧かず、世界が広がらない」などの悩みを当事者から聞くといい、「点字・触知図が普及し、少しでも行ける場所が増える一助になれば……」と話します。

日本博物館協会が令和6年度に調べた全国の美術館や博物館の現状は、点字解説の提供率は7・8%、ウェブサイトの読み上げや文字拡大

などは19・3%、スタッフ研修の実施率は16・2%となっており、特に小規模館ほど未整備の傾向になっています。

スマートフォンなどのデジタルデバイスを使った情報提供の方法もありますが、点字・触知図には、通信環境に左右されず利用できるといった「アナログならではの、良さもあると思っています」と佐々木さんは言います。

情報の選別も重要

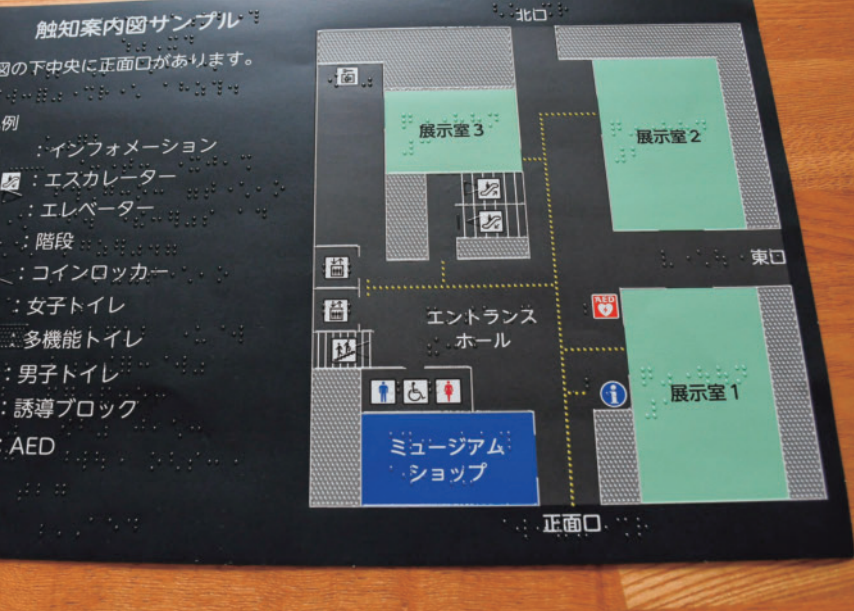
点字・触知図の制作には、企画打ち合わせから完成まで7～9週間ほど掛かることが一般的だそうです。

同社ドキュメント制作室のデザイナー・中村さんは、点字・触知図の制作工程で施設の方をお願いしたい3つの留意点を挙げます。

1つ目は、読みの確認です。点字は音を表す文字なので、特に地名や施設名などの固有名詞は読みが正しくなければ、正確な情報にはなりません。校正の時に提供するPDFファイルには、点字に振り仮名を付けた形となっているので、点字が読めない人でも確認できるそうです。

2つ目は、施設や現地の状況と、触知図との整合性の確認です。制作側は資料や図面を基にしつつも、実際の縮尺より位置関係を的確に伝えることを優先します。これは、点字の大きさはJIS（日本産業規格）で決められ、縮小・拡大はできないため、点字を配置するスペースを確保するため、図を誇張・簡略化して表現する場合が多いそうです。

また、提供された図面とは異なる配置や設備に変更されている、点字・触知図に落とし込むべき誘導ブロックなどのバリアフリー動線が、



一般的な案内図のように見えますが、透明な点字やザラザラ模様が印刷されています（点字・触知図のサンプル。このサンプルの解説は6～7ページをご覧ください）



全国各地の実績特色を説明する渡辺さん

一般の動線とは異なるというケースもありますので、現場の視点での確認が必要と話します。

3つ目は、その点字・触知図がどのように使われるかです。施設に初めて来た人が目的の場所までたどり着けることを目指すのか、施設の歴史や特徴的な部分を解説するものにしたのかなど、用途や利用場面が明確になっていると、制作が進めやすくなり、よりよい点字・触知図を作ることができます。

中村さんは「点字・触知図は情報をたくさん載せればいいというもの

ではなく、記載する情報の切り分けが大切です。作って終わりではなく、ぜひ、活用していただければと思います」と強調します。

当事者が 分かりやすいものを

点字・触知図を導入している施設の一つ、東京都豊島区にある「古代オリエント博物館」は、視覚障がい者向けギャラリーツアーを企画した際、据え置き型の案内板では順番待ちが生じるため、持ち運べて手元で



「触れる絵」の感触を確かめる参加者

確認できるフロアマップがほしいとの声に参加者からあったことが、制作するきっかけでした。「視覚障がい者へのヒアリングを踏まえ、当事者にとっての分かりやすさを最優先にした触知図ができました」との感想を同社に寄せています。

埼玉県さいたま市にある「彩の国さいたま芸術劇場」でも、視覚障がい者を対象にした見学・コンサートツアーの開始にあたり、点字・触知図を作成しました。施設管理者からは「現地視察に基づくバリアフリー経路も、もれなく反映され、専門機関による点訳の校正・監修も心強かったです。ツアーも大成功でし



さまざまな形態の点字・触知図に触れるセミナー参加者

た」と喜びの声が届きました。

小ロットの 制作にも対応

点字・触知図の制作にあたっては、国や公的機関による補助金・助成金制度もいくつかあるそうです。渡辺さんは「ある大学からは、目にハンディのある受験生がいるので、入学が決まったら1部だけ点字・触知図を作れないかという相談を受けました。印刷物とは言いつつも点字・触知図は小ロットの依頼も多いので、ボリュームが少ないからと遠慮せずに問い合わせを」と呼び掛けています。

点字・触知図の実際と制作のフローを紹介します。

制作のフロー

■準備と編集

施設に合わせた記載内容を一緒に検討します。

- ・どのように使用するか
- ・何を伝えたいか

施設側で用意するもの

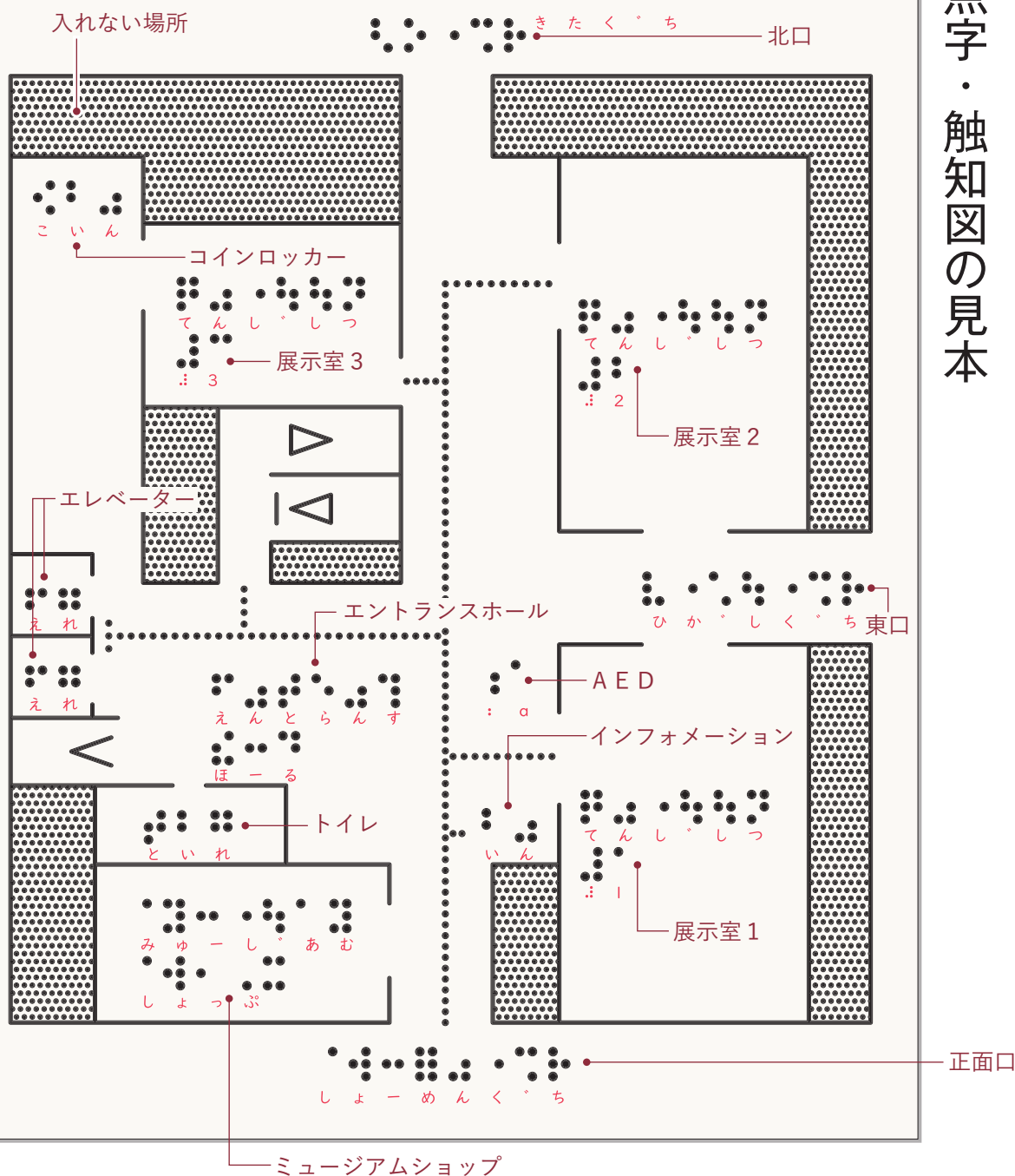
- ・施設に関するテキスト原稿
(A4サイズで漢字かな交じり文
250文字が目安です)
- ・エリアのフロアマップ
- ・ロゴマークなどの規定データ類

内容に応じた制作仕様を視覚障がい当事者の助言をもとにして、点字印刷物として適切な文字数と図や表の表現を、検討して誌面の設計を、します。

■点訳

点訳者が、わかりやすく正確な点訳を行います。

点字・触知図の見本



■デザインとレイアウト

視覚障がい者と晴眼者が共用できるユニバーサルデザインを行い、印刷物と点字・触知図から、同じ情報が受け取れるように調整します。

■触読校正

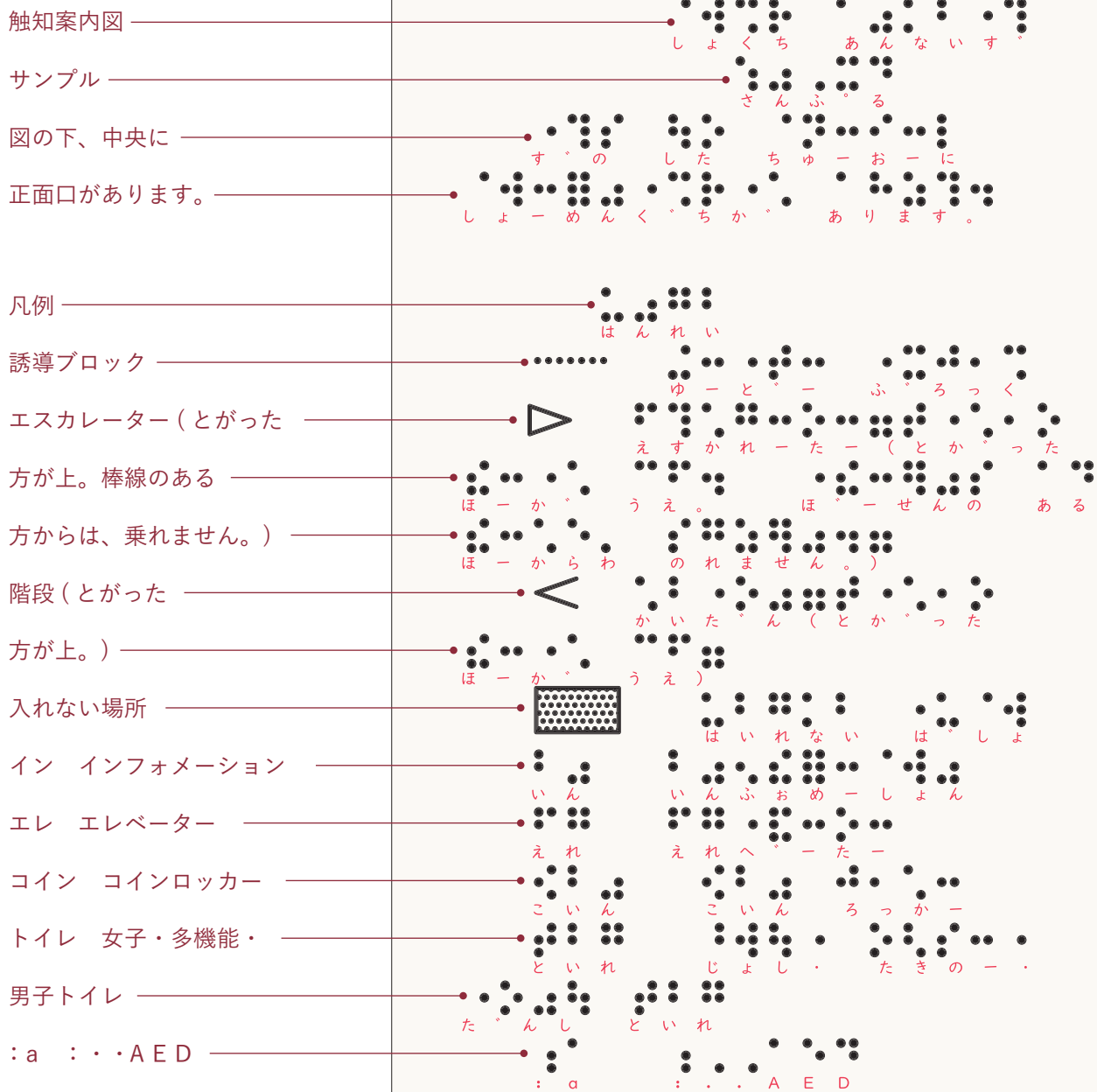
点字の校正にとどまらず、触知図との整合性や可読性などについてもチェックします。

■校正

点字には「よみ」を振ったPDFでチェックします。(下図参照) 点字は音表記のため「よみ」は施設側で確認する必要があります。

■制作

点字と触知図部分は、透明なUVインキを使用して印刷し、紫外線を照射して盛り上げ加工を行います。透明なので文字や絵柄の上に重ねて印刷しても視認性を損なうことはありません。印刷後は、点字や紙面にダメージが無いように型抜きや製本加工を行います。



2025年9月23日～11月16日

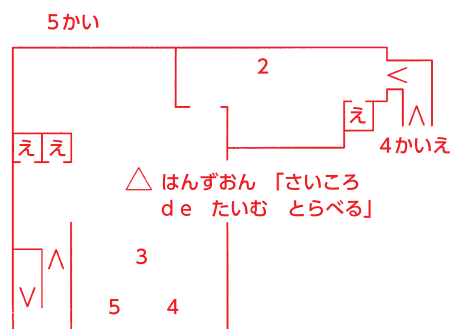
くてくコリアー韓国文化のさんぽみちー」での制作実例。

点字 & 触知図

UVニス
印刷による
& 触知図

点訳

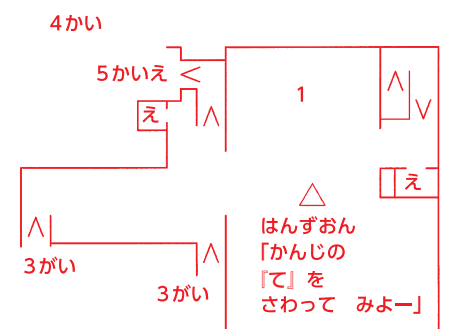
とーよーかん 4かい、 5かい ふろあず
したの ずわ 4かいと 5かいの ちずです。
ひだりがわが 5かい、 みぎがわが
4かいです。



はんれい
△ かいだん (とがった ほーが うえ)
え えれべーたー

ちずに ある すーじわ おんせい がいの
さくひんが てんじ されて いる ばしょです。
この ページの みぎしたに QR
コードが あります。

☆ はんれいわ ひだり ページの ずの した



点訳用に情報整理

視覚に障がいのある方が
使いやすいように情報を整理し
「かな化」します。

展示会場では、視覚に頼らず作品を楽しめるよう、音声ガイドや触れる展示など、さまざまな工夫が施されています。

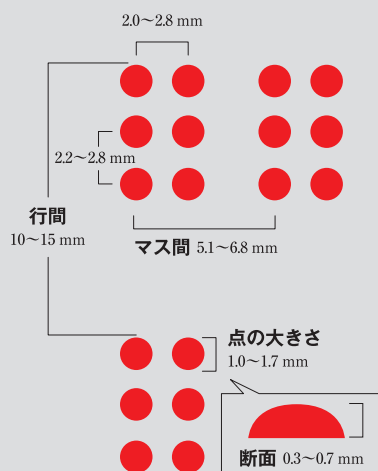
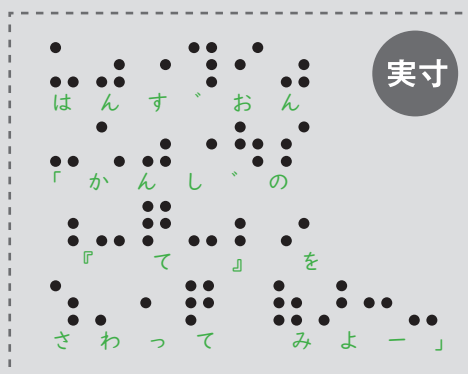
そのため、フロアマップの点字や触知図は、印刷内容を単に置き換えるのではなく、「触って・聴きながら」展示を巡る体験をサポートする地図となるよう、点訳用に情報を整理し直しています。

凸のある点字と触図の盛り上げには、UV ニスによる厚盛印刷を採用しています。



UV ニスによる点字

点字のルール —JIS規格—



点字は縦3点、横2点の6点が一つの単位になり、その単位をマスといいます。

文章は左から右へ横書きにするのもルールです。点の大きさやその間隔なども JIS で決められています。

点訳監修証明 を発行します

点字や触図の校閲は、専門機関に依頼しています。校閲の結果は、「触読確認実施日」や「確認者名」を明記した「点訳監修証明書」として発行しています。

東京国立博物館 東洋館 「博物館でアジアの旅 日韓国交正常化60周年 て

点字は左上から右下へと
指でなぞって読みます。

触る

点字や凹凸のある線
は透明なUVニスで
厚盛印刷しています。

見る

4色
カラー印刷

目と手にやさしい「角丸」仕上げ。

規格：AB判(257×210mm)
加工：2つ折り 角丸仕上げ
刷色：カラー+UV厚盛

触読性と安全性を重視した設計

点字の大きさや1行に入れる文字数などはJIS規格で決められているため、それらを踏まえたうえで手に持って使用しやすいサイズに設計しました。

また、弱視の方などは、紙面を目のすぐ近くまで寄せてご覧になることがあります。そのため、紙の角が目に触れても傷つけることのないよう、四隅を丸く仕上げる「角R加工」を施しており、手に触れても安全な仕様です。



固定式のフロアマップは、入り口に設置して点字も打刻されていますが、視覚障がい者の方からマップを持ち運べるほうが便利という意見があったことも、点字・触知図版のフロアマップと展示解説を兼ねた館内ガイドを導入するきっかけになりました。

貨幣博物館や東京国立博物館では、既に点字・触知図のリーフレットを作成していたので、これらを参考に、欧文印刷さんと話し合う中で、館内ガイドの具体的なイメージが固まり、2025年度に点字・触知図版の館内ガイドを10冊作成し、貸し出しを始めました。

当館の展示スペースは狭いため、約5000点ある館蔵品の中から約400点を選んで、年に3回ほど展示を入れ替えています。展示品が変わるたびに、ハンズオンツアーも実施しており、ハンズオンツアーも同じ内容にならない点も魅力の一つで、多くのリピーターが申し込まれています。

点字・触知図の館内ガイドについては、基本的な展示の情報から優先的に整備しており、展示が変わるたびに差し替えながら活用していくという運用を図ろうと、順次制作を進めています。

ツアー以外の時に、視覚障がい者

の方がどのくらい来館しているかは集計していませんが、2026年8月のある日、1組の視覚障がい者と介助者の方が足を運んでくれました。ツアーに申し込んで落選してしまったので、それでも「点字・触知図のガイドがあると聞いて、頑張つて来ました」と話されていました。

視覚障がい者の方々の中で、当館の取り組みを認知する方が増えてきたタイミングで、点字・触知図リーフレットが完成し、バリアフリーに向けた取り組みがさらに一歩前進できて良かったと思っています。

「来館のきっかけになる」との反応。 立体物を伝える 新たな課題と展開

ハンズオンツアーに参加した30人ほどの視覚障がい者の方にアンケートをお願いしたところ、点字が読める方からは点字のリーフレットがあるだけでうれしいという意見がありました。中途失明の方は点字を読めない場合もあるので、音声案内もあつて情報にアクセスできる機能が複数ある点が良いなどと、総じて好評で、「こういうツールがあると博物館に来るきっかけになる」と評価いただいています。

一方で、展示品の多くは立体物で



フロアマップを触る様子



点字解説ページを触る様子



触知シール (15種類)

特徴：カラー印刷したシール面に、透明なUVニスを盛り上げて、点字のほか、線や図形を組み合わせることで触知図を印刷しています。また、カラー印刷があることによって、晴眼者も視覚障がい者も楽しんでいただけます。

使用目的：当館が所在する豊島区では、複数の文化施設をめぐるスタンプラリーなどの連携事業が盛んに行われています。「誰もが楽しめるミュージアム巡り」のあり方を模索する中で、視覚に障がいのある方々にも「イベントに参加したい」と思っていたようなツールを開発したいと考え、今回の制作を依頼しました。今後は、イベントのノベルティとしての活用はもちろん、ガイドブックを使った連携ワークショップの開催など、さらに活用の幅を広げていきたいと考えています。

古代オリエント博物館が実施している 多様な取り組み

オリ博・バーチャルミュージアム



製作：
塩崎デザイン株式会社

古代オリエント博物館のコレクション展を
webで体験できる。メイン画面をクリック
すると展示室へ入ることができます。

音声ガイド・古代オリエント博物館

シリアやイラン、イラクにエジプトまでを含む、文明発祥の地オリエント。古代ローマの人々が畏敬と憧れを込めて「太陽の昇る地」と呼んだその地域には現代の私たちへとつながるルーツが隠されています。そう、これは始まりの物語。

BGM 監修：
作曲家 上畑正和



社会包摂を役割とし、
誰もが自分に合った方法で
楽しめる博物館へ

視覚障がい者の方にヒアリングした際に印象に残ったことが、「あまり外に出ない」という方々が多かったことです。その時、当館が安心して楽しめる場所になれるよう努めなければ、との思いを新たにしました。

現代では、社会包摂（年齢、障害、国籍、境遇などに関わらず、全ての人を孤立や排除から守り、社会の構成員として迎え入れて共に生きる場を提供すること）が、博物館の役割の一つとして求められています。見える人、聞こえる人だけでなく、さまざまな人々がそれぞれの方法で博物館を楽しめるように、見るだけでなく、触れたり、聞いたりできる多様なツールやプログラムを、これからも充実させていきたいと思っています。

4、5月のゴールデンウィーク期間中は、特別展がない限りは、イスラム文明の陶器などに触れたり、古代コインの打刻方法を体験できたりする小企画を毎年行っていて、スタッフも通常より多めに配置していますので、障がいのある方にも楽しんでいただけたと思います。

手話解説動画や バーチャルミュージアムで、 多様な来館者に対応

様々な来館者に対応する取り組みとして、聴覚障がい者向けには、手話による展示解説の動画を作成し、展示室内の二次元コードで読み込むツールを作りました。こうした取り組みを始めるに当たっては、事前に

障がい者団体にヒアリングを重ねています。生まれた時から聞こえない人は第一言語が手話なので、日本語の文字で展示品の紹介文を読んだり、映像の字幕を追ったりするのは大変だということでした。それで手話による解説ツールを2年前から導入しています。助成金をいただきながら少しずつ解説映像を増やしている段階です。

このほか、当館ホームページには、アクセシビリティやバリアフリーに関する情報をまとめたページを作成しており、どのような支援を提供しているか公開しています。また、移動が困難な方や遠隔地の方にも楽しんでいただけるよう、ホームページ上で「バーチャルミュージアム」も公開しています。

桜雲会のエキスパートが描く情報保障

社会福祉法人桜雲会

——甲賀佳子さん、
佐藤義裕さんに聞く



社会福祉法人桜雲会(東京都新宿区)は、1892(明治25)年、東京盲啞学校(現在の筑波大学附属視覚特別支援学校)の同窓会として発足し、1902(明治35)年に点字の医学書を出版して以来、点字出版事業を行うとともに、自治体の点字・音声広報の製作や駅の点字サインの監修等を受託しており、欧文印刷の点字・触知図もその一つです。触読校正のエキスパートである同会の甲賀佳子さん、佐藤義裕さんに、触読校正にあたっての留意点のほか、点字・触知図の必要性などについて話を聞きました。

(文/片山健一)

エキスパートが語る、触読校正の歩みと強固なパートナーシップ

甲賀さん 前職では、日本点字図書館に30年近く職員として勤務し、点字や触図の校正を行ってきました。退職後、2018年に桜雲会でアルバイトとして勤務し始めてから、欧文印刷さんとの付き合いが本格的に始まりました。

佐藤さん 2018年から桜雲会の職員として勤務しています。全盲で、いくつかの職場で触読校正などの経験を20年ほど積んできました。点字の専門資格である、点字技能師と点字指導員という2つの資格を持っています。点字校正のほか、駅の構内案内図のような点字サインなどの校正も行っています。

甲賀さん 二人とも欧文印刷さんとは8年ほどの付き合いですが、非常に内容の濃い仕事を手掛けており、私ども触読者の意見にも真摯に対応していただき、良い仕事ができていると感じています。

マニュアル化できない点は「経験」で補う。自由度が高いからこそ奥深い点字・触知図の校正

甲賀さん 点字や触図は、目が見えない人なら誰でも読めるものと思われがちですが、見えない人の監修を受け、制作段階から一緒に作り上げたものでなければ、分かりやすいものとはなかなか作れません。

テーマパークや新しい施設が、点字・触知図のパンフレットなどを作るようになってきました。点字に関する有資格者は何人もいますが、どうしたら読みやすく、分かりやすくなるかを提案できるようにするまでには、さまざまな経験を重ねる必要があります。そうしたものを校正できる触読者は非常に限られています。

佐藤さん 触図の触読に関しては特別な教科書や訓練がありません。小さい時から積み重ねてきた触ることに関する経験と、約20年の点字関連のキャリアで手掛けてきた触図の経験値から、次第に勘所がつかめてきました。以前手掛けた仕事の反省点などを踏まえ、少しずつ進歩してきたと感じています。

読みやすく、分かりやすい点字・触知図は、一朝一夕に作れるものではありません。点字表記には『日本点字表記法 2018年版』というマニュアルがあり、一定の決まりごとが

ありますが、実際にはどちらとも言えないグレーゾーンのこともあります。それに比べて、触図にはJIS規格がありますが、規則として決まっている範囲はそれほど多くなく、どちらとも決められないことが多く、経験豊富な触読者の意見に頼ることが多くなります。自由度が多い中で、今までの経験を頼りに、こんな線を引いた方が分かりやすいとか、以前の表現は分かりにくかったから変えた方が安全かもしれないとか、さまざまなことを考えながら校正しています。

私は全盲なので、校正には立体コピーというのを使っています。点字と図の白黒データを特殊な紙にレーザープリンターで印刷して、専用の現像機に通すと、黒い部分に高熱が加わって数ミリ盛り上がり、触って読めるようになります。その立体コピーを手にして、原稿を持った晴眼者と向かい合って、校正したり、アドバイスをしたりしています。

点字と図の距離感に悩む日々。利用者目線を極める妥協なき仕事

佐藤さん 最近手掛けたのが、江戸東京博物館のパンフレットですが、A4判4枚分がジャバラ折りです。机の上に立体コピーを全ページ分広げて、触読していきます。晴眼者には、私が読み上げていく内容が合っ

ているか確認してもらいます。

具体的には、点字の部分は「東京都江戸東京博物館フロアガイド」「6階案内図」などと読み上げていき、晴眼者と間違いがないか確認していきます。触知図を読み上げるの

には結構技術が必要で、例えば「6階の図と5階の図に分かれていますね」という全体的な話から始めて、

「6階の入り口から歩くつもりでやみましょう」と方針を決め、「入り口にゲートのようなものがありますね」「あります」「入り口を通ったら、右の方に案内所があります」「はい」などと対話を繰り返しながら、間違いなどを見つけていきます。

点字は文字の大きさが常に一定なので、限られたスペースに情報を納めるために、触図には必ず略記の凡例を入れます。「エ」と書いたらエレベーター、「アン」と書いてあったら案内所といったものです。触図では、まず凡例を読み、その図で使われている略記を頭に入れてから図

を読んでいきます。これは校正の時も、ユーザーが読む時でも同じです。間違いを見つけるのは比較的簡単ですが、難しいのは、点字と図との距離感です。書いてある内容に間違いはないけれど、どこに書くことがより適切かを考えることです。入り口の「イリ」という点字は、点字を

読んでから入り口の位置を確認できるほうが望ましいのですが、スペースの都合で入り口の印より内側にしか書けない場合などは、どう工夫したら分かりやすくなるかといったことで悩みます。

頭の中に会場の地図を描く——

点字・触知図がもたらす醍醐味とは

甲賀さん 以前校正した世界的な大規模イベントの点字・触知図パンフレットは、1冊で50〜60ページもある厚い冊子でした。図10枚を1週間のペースで校正する非常にタイトな仕事でしたが、なんとか間に合わせることができました。

私はそのイベント会場に行っていないませんが、点字・触知図を作ったことで、まるで会場に行ったかのように、施設の形状や配置などの情報が頭に入っています。

実際にイベント会場に出かければ、そのにぎやかな雰囲気などは体

感することはできますが、見ることはできません。触図であらかじめ頭に入れておいたイメージを、現地に行って体感し、また改めて触図を触って確認するという双方向的な営みこそが、視覚に障がいのある私たちの大切な概念形成につながります。

点字の解説文章だけを読んでも分からなくはないのですが、図で確かめることによって、広大な会場や施設の全体像をより具体的に理解でき、想像を巡らせることができます。こうした疑似体験は、私たちにとって非常に楽しく、点字・触知図の醍醐味の一つだと思います。

名画を指で知る——「触覚記憶」が 広げる美術鑑賞の可能性

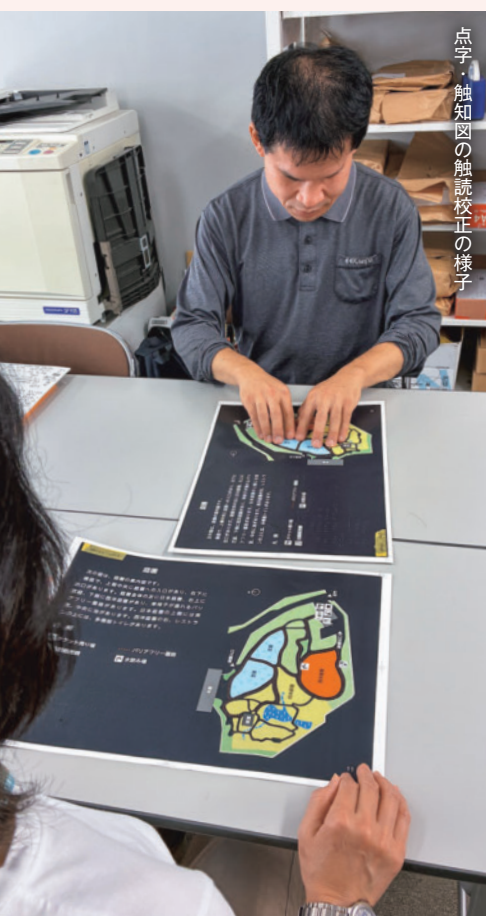
佐藤さん 絵画の触図は、情報として知らせるためというよりは、見える人の描き方はこうなのかとか、知的好奇心を満足させてくれるものです。絵画は案内図などと違って作者が

決まっているので、例えば遠近法や影、色遣いなどの視覚的な表現を、分かりやすさのためだけに整理することがしにくい面があります。だから、触図に触れることで、見える人と同じように絵を鑑賞できるかと言われると違うとは思いますが、見える人が一緒にいて「今触っている所が顔だよ」「こういう景色があるよ」という説明を聞きつつ触れば構図も同時に理解できるので、目が見えない人の体験をより豊かにすることにとても役立つと思います。

甲賀さん 小学生でも知っているミレーの「落ち穂拾い」という絵を、全員の私は見たことがあります。ですが、その絵が、3人の農婦が下を向いて、完全に腰を曲げた人もいれば、立ち気味の人もいる風景であるという構図は、私の頭の中に浮かんでいます。

なぜ、これが分かるかというと、山梨県立美術館で「落ち穂拾い」を立体化した絵があり、それを2回ほど触ったことがあるからです。そこで覚えた「手の記憶」です。見覚え、聞き覚えと同様に、「触覚記憶」として残っています。

私たちにとって、小さい時からいろんなものに触れることは、すごく大事なことです。多少熱いものや冷たいものにも積極的に触れるという



点字・触知図の触読校正の様子

能動的な経験を重ね、触れば分かるという実体験が大事です。

社会環境の整備推進を実感。 求められるソフト面のバリアフリー

佐藤さん インフラの面では点字の案内図を作る、点字ブロックを敷く、駅にホームドアを付けるなど、町の中にいろいろな設備が増えていく実感があります。特にこの仕事をしているとよく分かります。小さな無人駅や商業施設などの触知案内図の仕事が増えたような気がします。神奈川県では数年前、全ての県立公園で点字・触知図のガイドマップを作りました。法律ができたことで、作り手の意識が高まり、そのための予算が確保され、整備されていることをうれしく思っています。

ただ、生活の実感で言うと、人の対応には格差が大きいと思います。お店に入った時に手伝ってもらいやすくなったとか、外食に行きやすくなったかという、10年前とあまり変わらないと思う時もあります。障がいや法律に関する情報は、スマートフォンで調べられる状況にはなっていますが、関心が薄い人は調べないのであまり伝わりません。

甲賀さん 同行援護制度も確立され、以前よりは外出しやすくなりました。私の学生時代は、買い物に行こうとしたら、友達、あるいは親兄

弟と一緒にきましたが、それは保証されたものではなく、仲が悪くなってしまう、行けなくなります。行き当たりばったりで、一人で出掛けて危ない思いをしたこともありま

す。駅に点字ブロックも、ホームドアもないのが当たり前だった時代に、私は2回ホームから転落したことがあります。今は小さな駅にも点字ブロックが敷設されるようになりました。ホームドアも整備されつつありますが、転落の危険性がまったくなくなったわけではありません。

私たちが事故に遭わないために、施設の案内図で予習し、頭の中に地図を描いておくことがとても重要だと思っています。

ガラスケースから外へ。 外出を後押しする事前情報と 「本物」に触れられる工夫

佐藤さん ガイドブックなどが点字・触知図になっていることは、その施設を訪ねる動機になると思います。ただ、そうしたサービスの存在を事前に知らない、たまたま借りられたという話になってしまっています。行く前に音声解説の機械が借りられるとか、お願いすれば事前にパンフレットを送ってもらえるといったことが伝わっていることが大事だと思います。

博物館、美術館の場合、触知図は

理解の助けにはなりますが、本物ではありません。できるだけガラスケースの中から外に出した、触れる展示品を増やしてほしいです。壊れやすいもの、歴史的なものなどはレプリカを用意してもらえるとうれしいですし、予約すればボランティアの方が付き添って展示品のことを説明してくれるサービスがあると、より一層楽しめます。

「あつたらしいな」を形に。

桜雲会が手掛ける オリジナル図書の発行

甲賀さん 130年を超える歴史の中で、鍼やマッサージでたくさんのお客様さんを施術した時代もありましたが、今は点字出版を主な事業としています。

普段は、官公庁など外部からの依頼を受けて点字資料の制作を多く手掛けていますが、オリジナル図書の点字出版も行っていて、桜雲会だからこぞできる本作りを目指しています。

見えない人が、こういう本があったらいいなというものを考えてオリジナルの本を作り、一般家庭で母さんと一緒に読むことも想定して、点字と墨字の両方の記述で出版しています。

最新のものでは、『触って楽しむ模様』という本を出しました。例えば、市松模様、タータンチェック、ペイズリー柄、ボタニカル柄とか言

われても、その模様を一度も見ただとがない人にはよく分かりません。模様を触れる形にしようと、亜鉛板印刷・エーデル・BPlot・立体コピー・サーモフォームという5つの触知手法の中から、それぞれ適した手法で模様を浮き上がらせています。

オリジナルの本は、年1冊も作れず、2〜3年に1冊といったペースです。以前作った『おりがみ絵本』も大変好評です。折り図を見ることができないので、折り方の手順に沿って折り紙の実物を本に貼り付けており、鶴の折り方は12段階に分解して説明しています。

【取材を終えて】

点字や触知図が単なる情報伝達にとどまらず、視覚に障がいのある方の豊かな体験や知的好奇心を育む重要な役割を担うと実感しました。インフラ整備に加え、私たちの意識やソフト面のサポートが不可欠だと感じました。



著者：社会福祉法人桜雲会「触って楽しむ模様」編集委員
発行日：2024年11月1日
価格：墨字版：2,000円
点字版(デジー付)：35,000円
発行所：社会福祉法人桜雲会



目に見えない世界を歩く ——「全盲」のフィールドワーク

ISBN 9784582858624
広瀬 浩二郎 著（平凡社）
新書判 264頁

障がい当事者の立場から盲人史研究に取り組んできた著者が、ユニバーサル・ミュージアムの実践例とともにその半生を軽快に綴る。



※図書紹介文は、出版社の情報を参考に整理しました。



万人のための点字力入門

——さわる文字から、さわる文化へ

ISBN 9784903690612
広瀬 浩二郎 編著（生活書院）
A5判 216頁

ルイ・ブライユ生誕200年を記念し、21世紀の新たなブライユ像確立のために“点字力”の広さと深さを実感するガイドブック！



世界はさわらないとわからない

——「ユニバーサル・ミュージアム」とは何か

ISBN 9784582860085
広瀬 浩二郎 著（平凡社）
新書判 272頁

新型コロナ禍のいまこそ、我々は世界にさわらなければいけない——。全盲の触文化研究者が問う「さわること」の意義と無限の可能性。

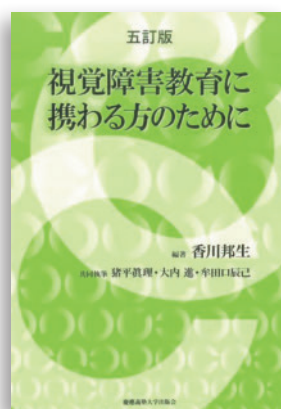


目の見えない私が「真っ白な世界」で見つけたこと

全盲の世界を
超ポジティブに生きる

ISBN 9784046055088
浅井 純子 著
（KADOKAWA）
四六判 216頁

音声入力で1冊書き上げました！ Twitter「浅井純子（じゅんじゅん）全盲の世界を超ポジティブに生きる人」で話題、浅井純子さんの初エッセイ！ みんなに知ってほしい、視覚障がい者の本音と盲導犬のこと——。



視覚障害教育に携わる方のために（五訂版）

ISBN 9784766423679
香川 邦生 編著
猪平 眞理 著
大内 進 著
牟田口 辰己 著
（慶應義塾大学出版会）
A5判 320頁

視覚に障がいのある子どもの特性や心理を踏まえ、乳幼児期から学校教育を経て社会的自立に至るまで、発達段階に合わせた養育・指導上の配慮を解説。教員はもとより、保護者やボランティアにとっても必読の書。



※季刊アイワードのバックナンバーを
弊社ホームページよりご覧いただけます。
URL <https://iword.co.jp>